

## 巻頭言

# 肉食系国際交流のススメ



清川 清  
大阪大学

### 1. はじめに

日本は大きな力を持つ小さな島国である。面積は世界で 60 位に過ぎないが、人口は世界で 10 位、GDP はいまだに世界で 3 位である。今を生きる日本人は、先人に感謝しつつ日本と世界の発展および調和に貢献する義務がある。その方法論は様々であろうが、研究者、技術者ができることは、日本発の良い成果を生み出し世界に発信すること、自身の分野を国際的に牽引すること、そして、ひとり人間として世界中の人々との交流を深め、ひとりひとりを心から尊重し、また、尊重されるよう努力すること、だと考える。

研究力、技術力はある。一昔前に比べれば、学生の語学力はずいぶん向上したし、各大学の国際交流プログラムも充実している。国際会議での論文発表はそれなりに頑張っているし、特に実演展示系は活発に行われている。それにも関わらず、アカデミアでの日本のプレゼンスはまったく十分ではなく、むしろ緩やかに下降している。第 15 巻第 2 号の巻頭言で北村先生が言われた「日本の存在感」、第 16 巻第 3 号の巻頭言で葛岡先生が言われた「日本のプレゼンス」は危機に瀕している。例えば、論文発表数に比して国際会議での委員数が圧倒的に少ない。また、国際会議につきものの学生ボランティアでは日本人学生を見ることは極めて稀だ。実際のところ、語学力がそれほど要求されない仕事も多いのだが、なんとなく不安が先に立つのかも知れない。

我々は研究者、技術者である前にひとりの人間である。ひとりの人間としての国際交流力が余りにも貧弱なのではないか。人と人の生身の交流がうまくできていないのではないか。モノやコトの発信で終わっていることが多いのではないか。相対的に見れば、やはり日本は閉鎖的な内向きの国である。日本人はクールでクレージーなガ

ジェットは作るけれども自分たちだけで群れて他国の人と交わらないナゾの人々だ。例外は多いし特に若い世代はずいぶんマシになってきているが、平均的には、日本人は顔が見えないし心が読めない、まだまだそう思われている場合が多いのではないか。

### 2. 肉食系国際交流のススメ

私は研究者としては至って平凡で、語学力も適当極まりない。恩師であり上司である竹村先生のような寝言まで英語で話すような芸当は逆立ちしてもできない。しかしながら、国際交流の場で重要なある種のずうずうしさ、あるいは「鈍感力」だけは若い頃からあった方だと自負している。相手が大御所だろうが大勢だろうが気にせず割り込み、話しかける。ほぼ最初（正確には 2 度目）の国際会議であった VRST 1996 では会話がさっぱり分からないにも関わらず大会長の Mark Green ら運営委員だらけの昼食にひとり何食わぬ顔で紛れ込んだものである。今から思えばさぞかし変な奴だと思われていたに違いない。訳が分からなくともそういう場に触れてエネルギーを浴びることで、自分に栄養が注ぎ込まれていくような気がしたのである。論文の著者としてだけ知っている憧れの人が目の前にいる。両目をキラキラハートマークにして、愛情たっぷりにつきまとう。国際会議に参加する度にそのような調子であった。まさにストーカーのごとき肉食系男子である。こういう KY な状態を真の国際交流とは呼ばないが、それでも日本人は良い意味での鈍感力をもっと備えるべきではないかと思う。

学生であれ、社会人であれ、それぞれの立場で国際交流力を鍛える機会は日々の至る所に転がっている。要は、相手への愛情をベースにしたちょっとした勇気と行動力、そして失敗を恐れない鈍感力なのだと思う。場数

をこなし、顔を覚え、覚えられていくうちに、振り返ればいつの間にかなんとかなっているものだ。

留学生と触れ合おう。研究室の留学生は寂しそうにしているだろうか。常日頃からよく会話しているだろうか。せっかく遠い異国から来てくれているのだ。もっと話しかけて今より深く知り合えるのではないか。我々の研究室は留学生が多いのが自慢で、特に短期留学生の増える夏季は全学生約30名の半数が海外出身で占められる。これまでの留学生の出身国の大半はアメリカとドイツであるが、それ以外にも欧州、アジア、南米、と10数カ国に及ぶ。研究室によって事情は違うだろうが、留学生は多くの場合もっとも身近な世界への窓口だ。

気に入った論文の著者にメールを書いてみよう。同じ分野を研究していて尊敬しています、いつか学会で会いたいです、といった内容だけでもいい。受け取った方は悪い気はしない。もっと具体的に実装方法や式の理解などで質問があれば尋ねてみればいい。たいてい喜んで答えてくれるだろう。メールは即時性が求められないから辞書も使えるし、発音や聞き取りの不安もない。ちょっとした交流が将来花開くかも知れない。

気に入った研究者の講演会に参加しよう。最前列で聴講すれば声がよく聞こえてスライドも大きく見えるので内容がよく理解できる。また、自分の前に他の聴講者がいないと周囲を気にせず質問できる。最初は質問すること自体がなかなかできないかも知れない。そういう場合は予め安全な質問を決めておくこともアリだ。例えば、最後のスライドの future work についてもっと詳しく教えてくれ、という質問はほぼいつでも使える。極論すれば、質問の答えが得られることよりも、会話を交わしたという事実自体が重要なのだ。

国際会議では外国人と話そう。せっかく国際会議に参加しているのに日本人とばかり会話していないだろう

か。わざわざ高い参加費を払って海外に足を運んでいるのに、普段から会える人たちと群れていないだろうか。時には日本人のいないテーブルに乗り込んでみよう。同年代の非英語圏出身者は声を掛けやすいかも知れない。研究に直接関係なくとも話すネタはいくらでもあるものだ。学生であれば趣味でもいいし、母国の生活でもいい。教員であれば研究室の様子や研究ファンドの仕組みでもいい。お互い知らないことだらけだし、会話をしているうちにさらなる質問が浮かんでくるものだ。

論文発表はする、参加者と会話もする、しかし、国際会議の委員などの雑用は面倒で避けたいという方々もかなりいるように見受けられる。会議運営や標準化にこそ、もっと日本人はコミットすべきだ。個人的には、国際会議の運営に関わることは論文を投稿するのと同程度に当然のことである。徐々に委員を選ぶ側に立つ機会が増えているが、私から見て極めて有能で活躍しているのに、海外から知られていない日本人が非常に多く歯がゆい思いをしている。研究例を示すと、ああそれなら知っているとな納得してもらえることもある。ポテンシャルから考えて、海外の研究者から見て顔の浮かぶ日本人が今の何倍も出てきて然るべきだと思う。依頼があれば引き受けるのはもちろん、たまには志願するくらいでいい。

### 3. おわりに

日頃おぼろげに考えている国際交流のあり方について提言してみた。私などより遥かに国際的に頑張っている諸兄が多いのは重々承知しているが、もっと底上げが必要だと思い、エラソーなことを書いてみた。不快に思われたならご容赦願いたい。これを機に、国際交流をもう少し気軽にやってみようと思ってもらえたら幸いである。

#### 【略歴】

清川 清 (KIYOKAWA Kiyoshi)

大阪大学 サイバーメディアセンター 准教授

1994年大阪大学基礎工学部情報工学科3年次中退。1996年奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士前期課程修了。1998年同博士後期課程修了。1999年郵政省通信総合研究所(現情報通信研究機構)研究員。2002年大阪大学サイバーメディアセンター助教授。博士(工学)。国際会議関連では、IEEE 3DUI Co-Chair (2008~2010)、IEEE VR Program Co-Chair (2012, 2014)、IEEE ISMAR S&T Program Co-Chair (2012, 2013)、同 Steering Committee、JVRC Program Co-Chair (2012)、ICAT Program Co-Chair (2011)、ACM VRST Program Co-Chair (2009) など。